へ13
3730
15
へ13
3730
16

へ 13
3730
15

門 ヘ13
號 3730
巻 15

其由縁鄙俤

種員作

八編上冊

豊国画

錦昇堂梓

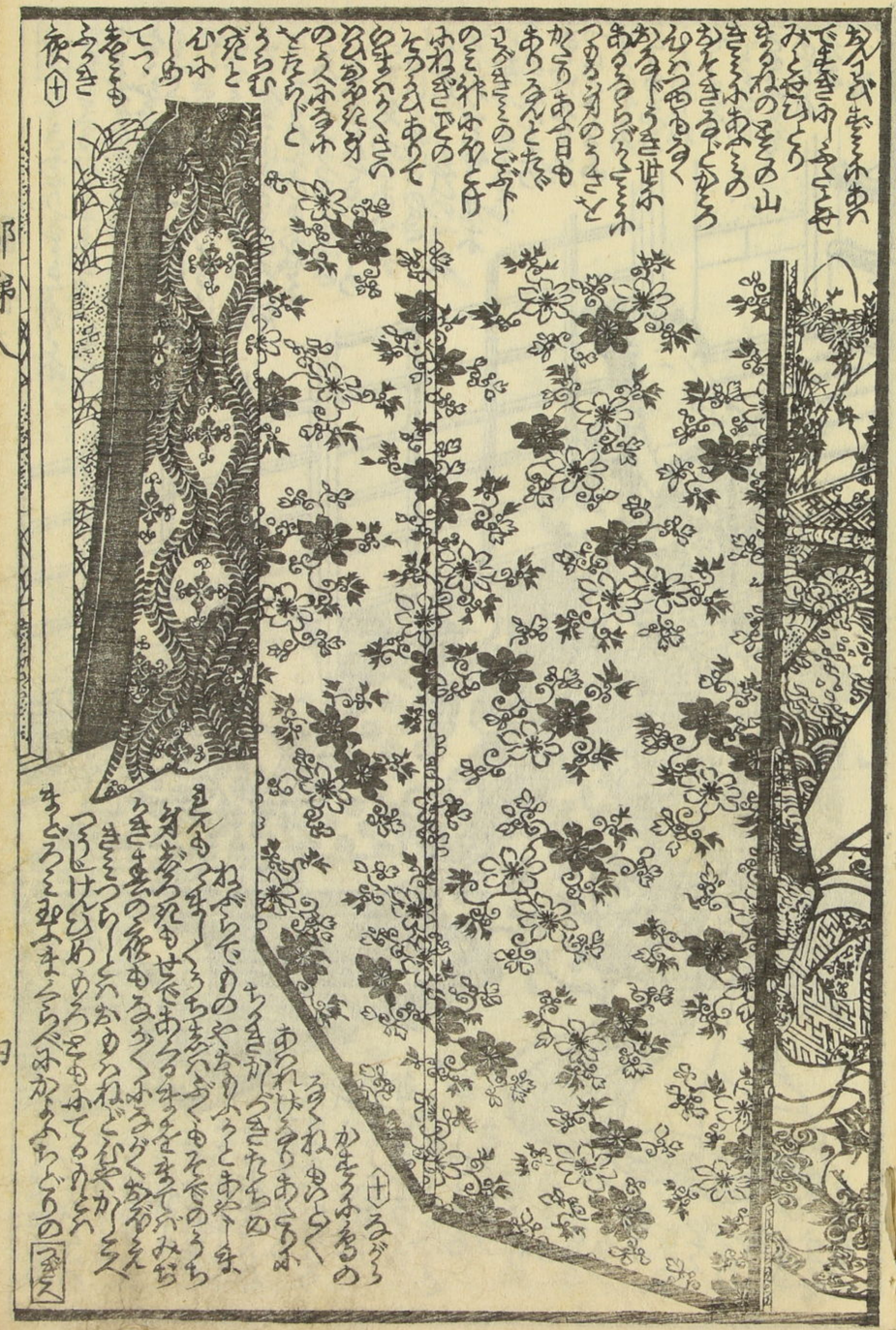
紫女が筆の妙なる哉此若菜より逆に上末摘花の巻中に姫君の御鼻の長きを普賢丼の乗物と見ゆ象に見立戯文にまで若彼君が獅々鼻ならぬ申やうかる案まいつらば文殊菩薩の跨坐と必定うれへやしつらん故柳源氏の巻といへるは文殊普賢に勝りて尊き救世大士の化身を著述して世に奇賞を既に久し其を擬へし此稗史に普賢の乗らせらる六牙の象に六編迄他人の作になりつるを七観音の七篇より縁故ありて已手に承てつ則薩埵の誓願にいふ枯るゝ木に咲花よりも冊子に文華を開かせん妙智力ある趣向もがなと頻に顧慮に苦めバさりとて欲得智慧文殊その乗物の獅子ならで狐に聊因ある信田杜にて導士になりし式部が例の曲文ふくめるしろ和泉前司といひし君を僅炱化せし大鳥郡司に媒氏に復び月の桂樹へ燿基殿の暮通ふまで談端まで此巻に綴ぬ

嘉永壬子泰月

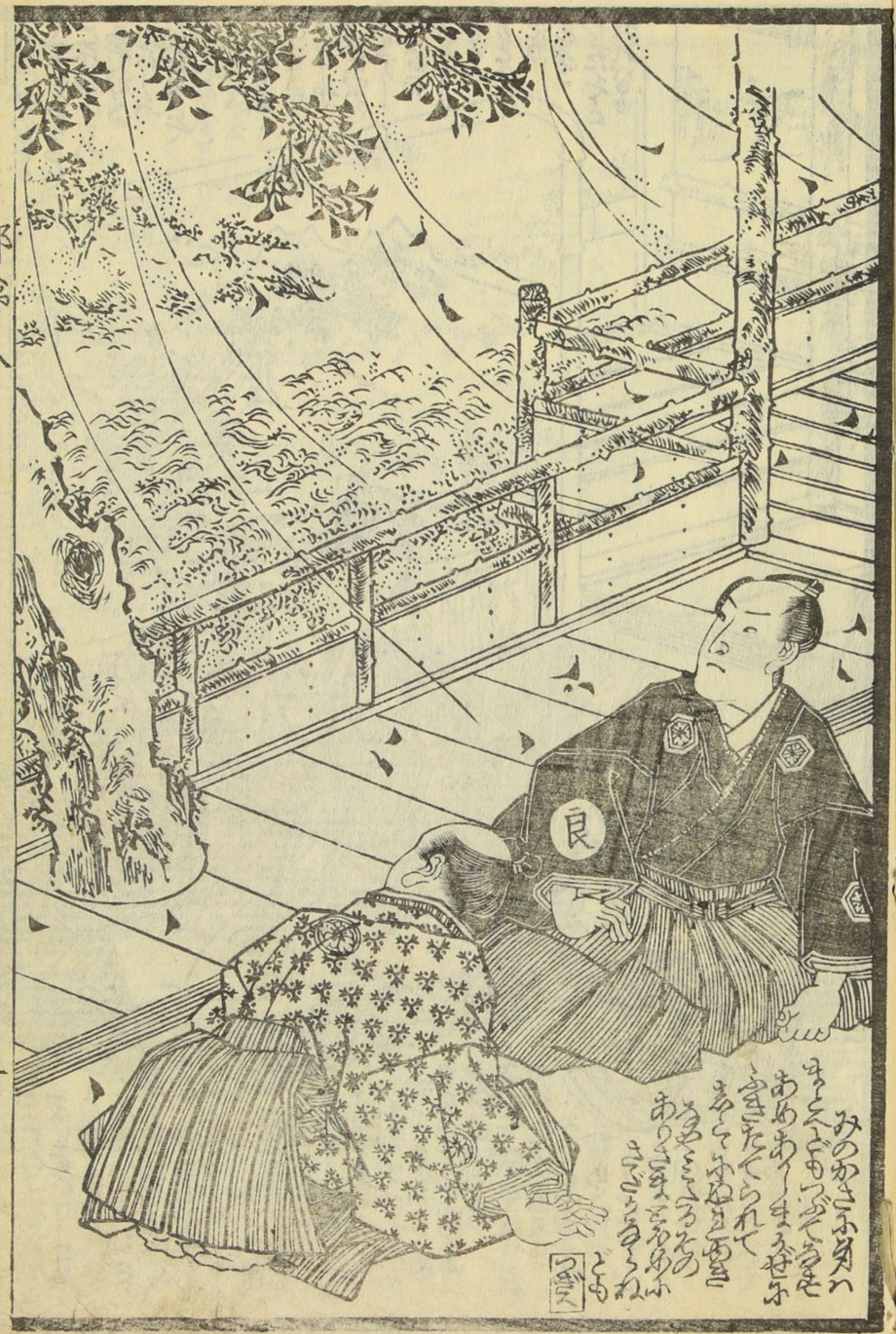
柳下亭種員記

年月を中る屋さんのかぶ抜の
さらさらたのしみあつまる

波のくもせき
とあつのこれ
きこつて
ゆれ
あんたい
きあく
こえこま



輝
維


良

輝
梅

二
輝
梅

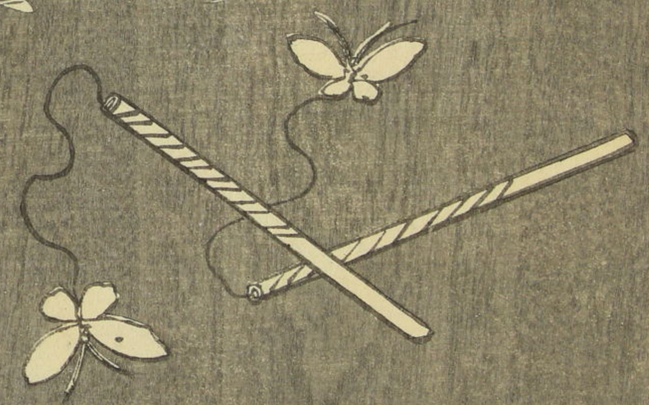
種員作
豊國画
この画のうけの
この美ふ
郡
神

へ13
3730
16

へ13
3730
16

乃田のり

心



二の巻とりつづき

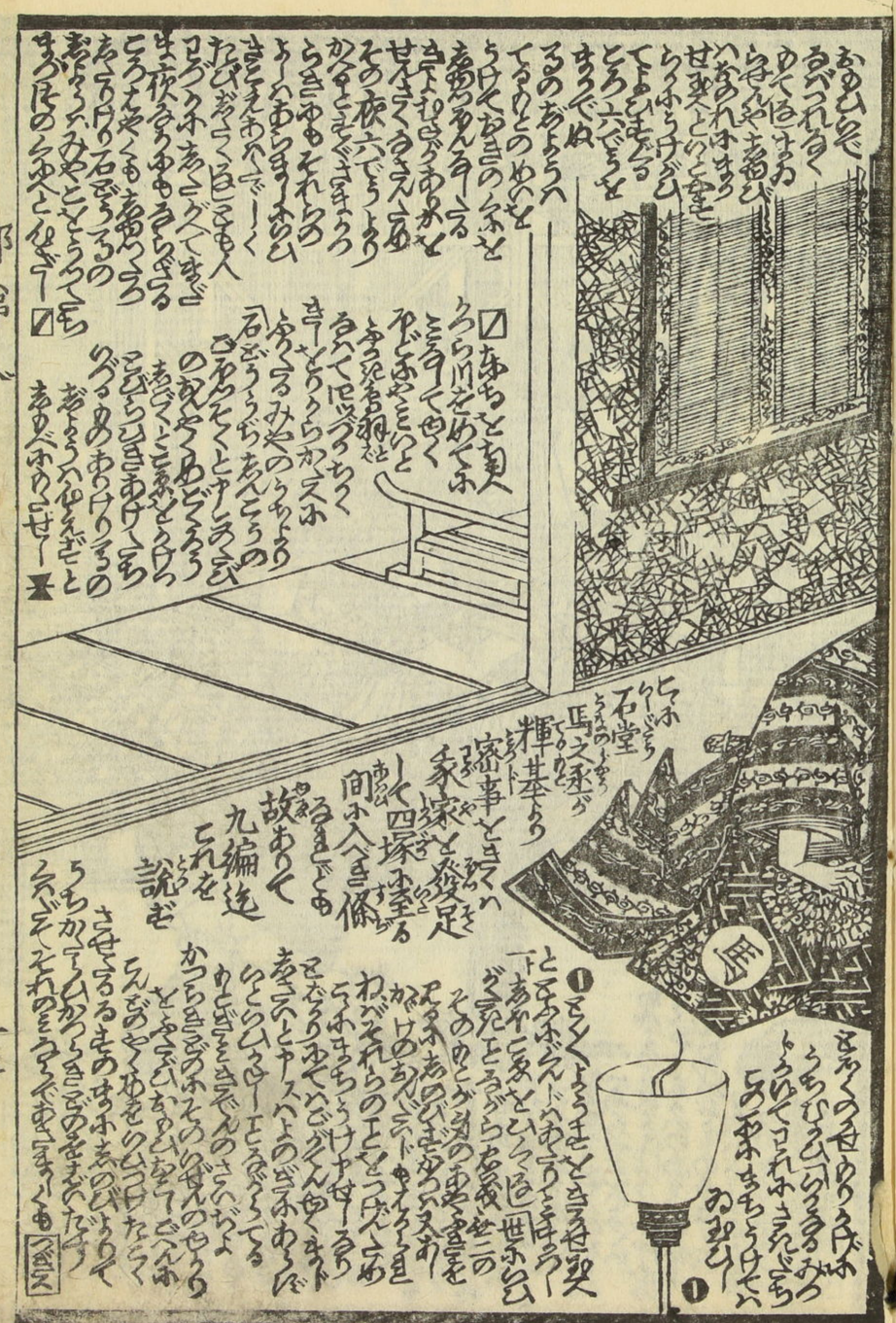
ひろまちごのとろ
なりませこそれぬかのきよひひごろ月の
うへかそれぐかりのひひあるめえもぎごいふ
ろうべきこぐとろごあかこえおんるせーめの
なれがそれときてていさてうもうちすて
めいうすーろうぢふせんぎの
ことをやどれんこをそうろて
きよひひごろあろうたらをりとあ
けどりきこれちてせようかと
のひかふるのおろうこいうけ
むろうちあ
ちろうちち
ろうろうぬ
ろあんきとろ
てきよひひご
ちこえとなりひ
めぐらもふ山名
そうゆうんらう
けるぐらもかれば
どえふぎろる
のをたもくぐた
ろうぎんるられば
ゆりんかもたちる
きぐちゆうぐのな
どんたる大内のきけ
ようきこそきよひひご
えそのおきてとふちうごろ

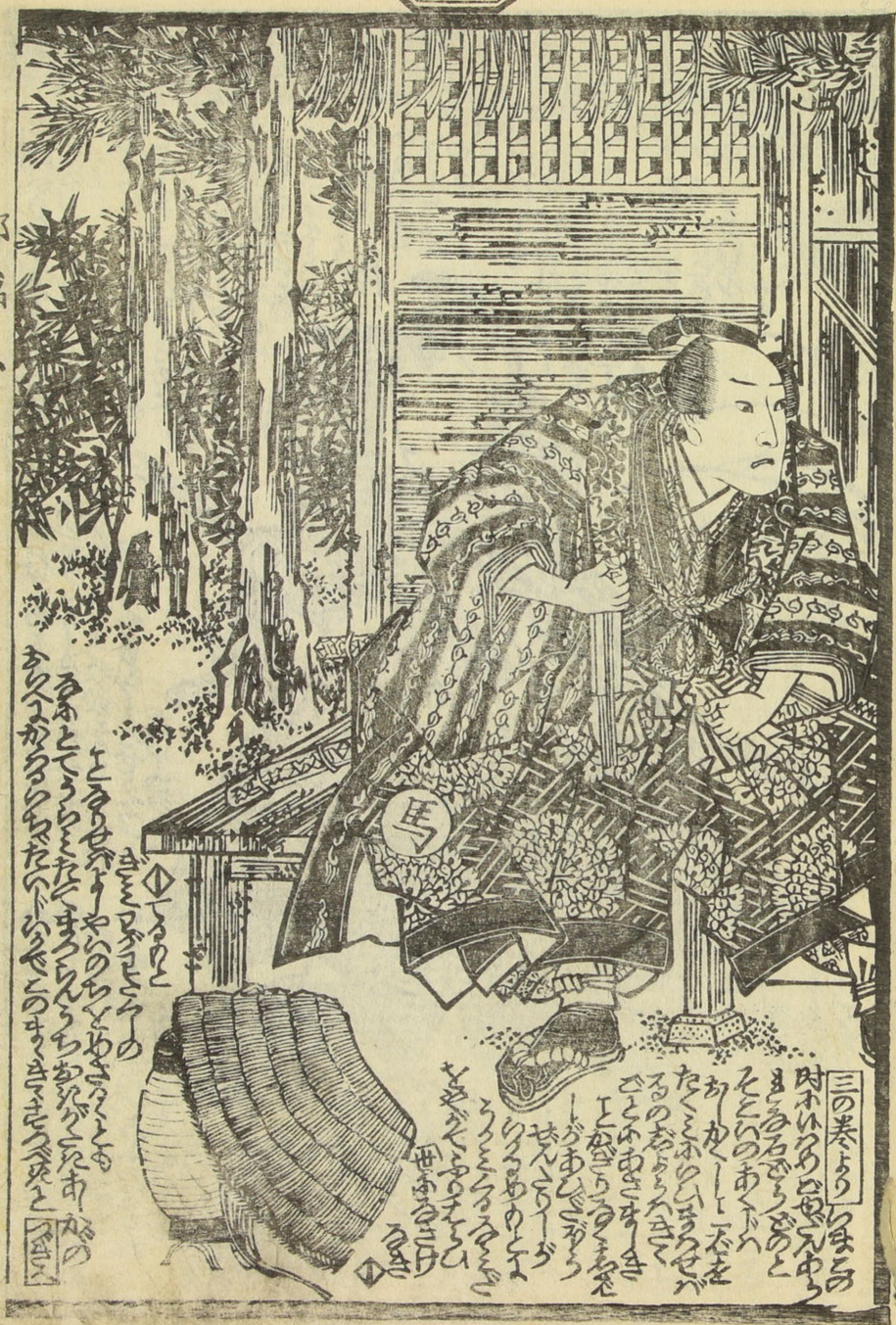
▼ろふとろく所心ぐのさもまちくろれば
とろひかるみのとちろら信田勢司徒ぐの
できげんとうがぐんろあさんおろうとの

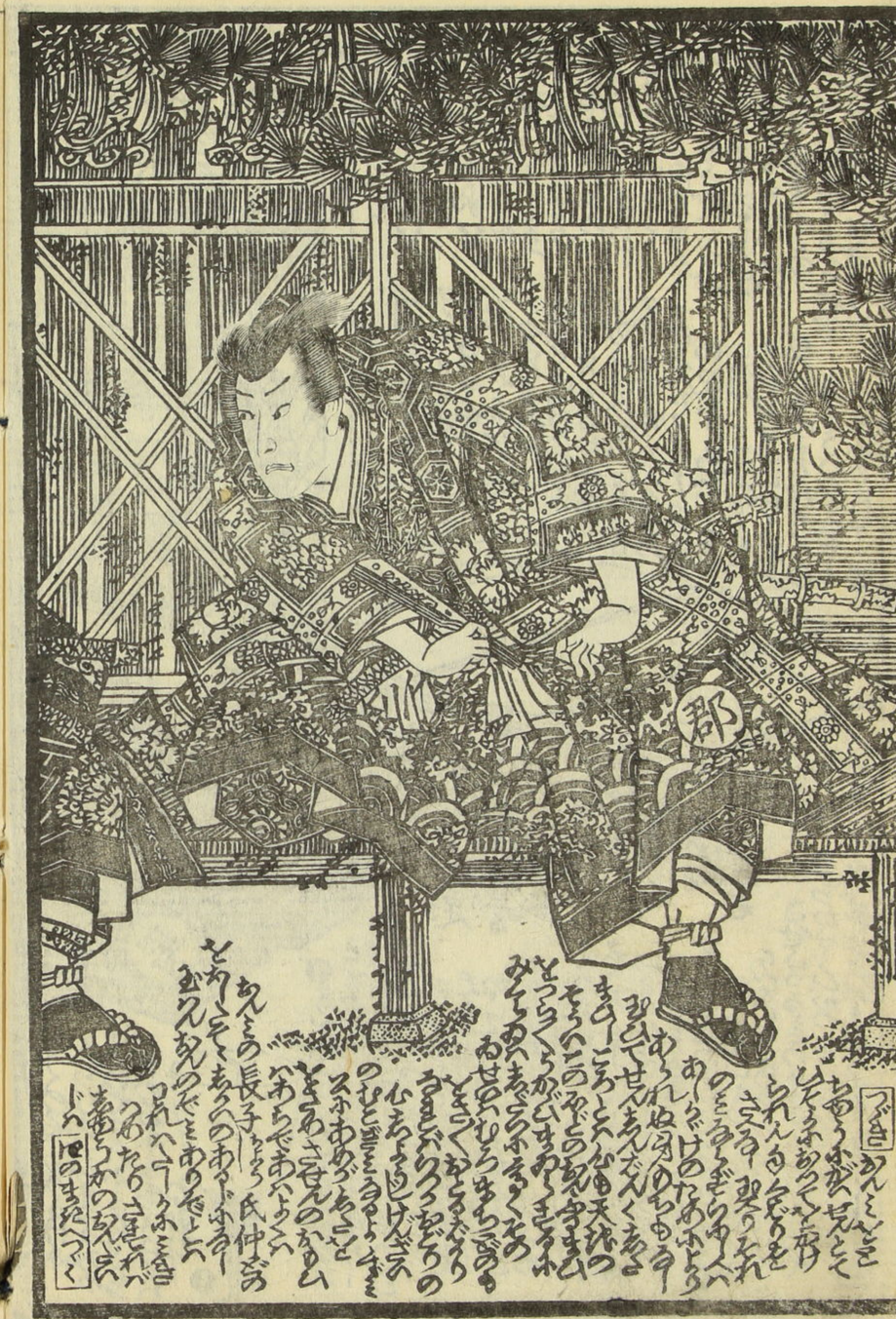
○ひろうのと
ぐふてろひと
ハそれとめく
ぐ甘ーえふ
ひろの
ぎろう
ハ図

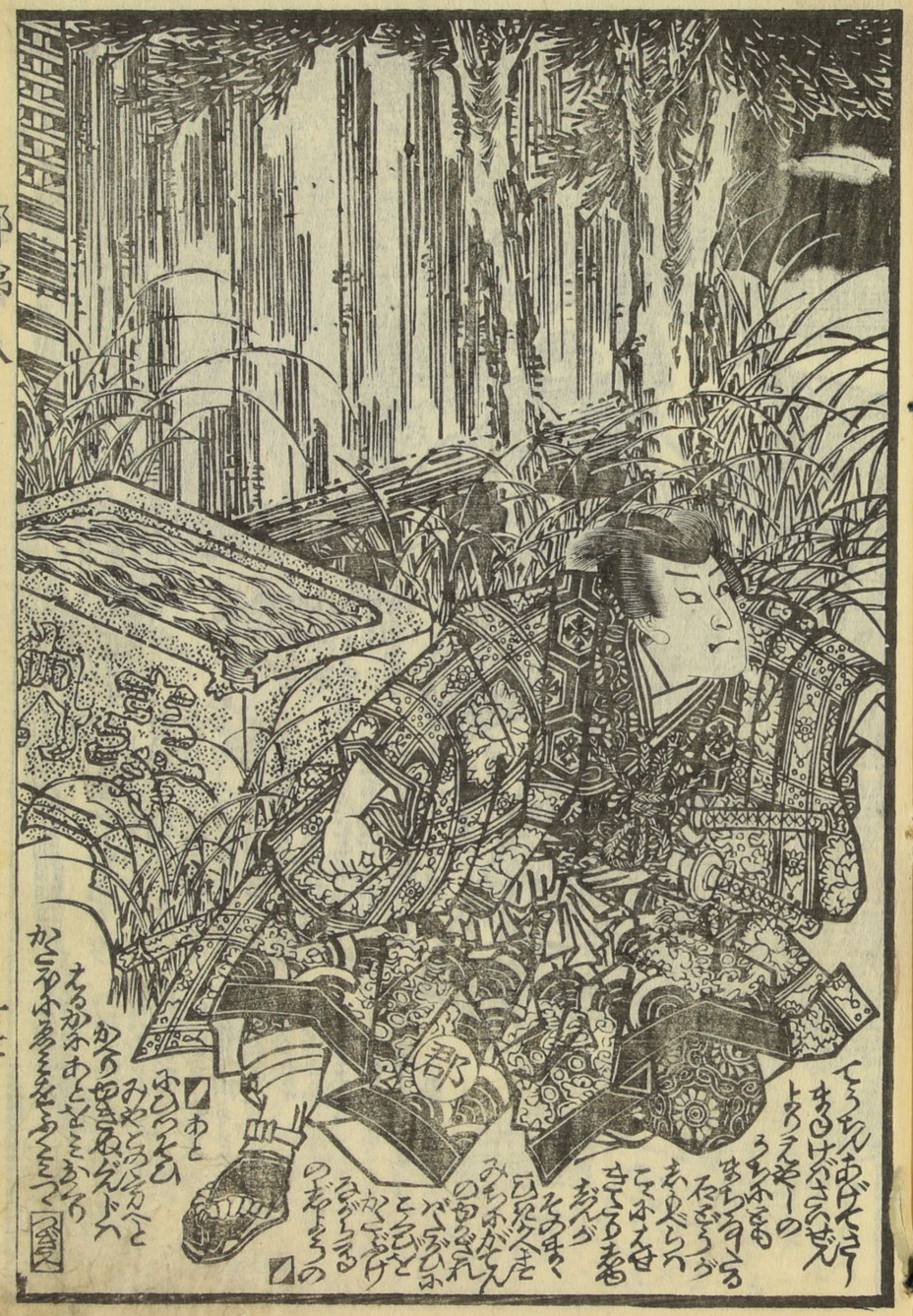
郡

輝









輝

光

薄紫宇治曙 七編 八編 九編 笠亭仙果作 一壽齋國貞画

与話情浮名横櫛 六編 七編 大尾 棋田舍好文作 一勇齋國芳画

菜種の花双蝶々 二冊 仙果作 切國輝画

仙女香 一包 四十八銭 京 坂本氏
美玄香 京 坂本氏

御伽譚博多新織 五編 六編 七編 棋田舍好文作 一勇齋國芳画

桃太郎鬼島記 椿説鬼魅談語 初編 五編 爲永春水作 一雄齋國輝画

禮
仁
智
義
信
孝
忠
悌